

1965年の朝日放送番組「リャンコ—竹島と老人の記録—」と『橋岡アルバム』—竹島アシカ猟写真の拡散の検証

はじめに

- 1 『中渡瀬アルバム』の概要
- 2 『橋岡アルバム』について
- 3 「リャンコ—竹島と老人の記録—」の番組
 - (1) 番組の制作・取材
 - (2) 番組の概要
 - (3) 竹島出猟に関する証言
 - (4) 番組で使用された資料映像



井上 貴央
(鳥取大学名誉教授)

- 4 竹島アシカ猟写真の拡散

おわりに

はじめに

かつて竹島で撮影された写真の年代・撮影者については不詳のものが多かった。先に筆者は、「韓国人海女が写るアシカ猟師の集合写真」は1941年に大阪毎日新聞の写真部員が撮影したことを明らかにし、『中渡瀬アルバム』と『橋岡アルバム』の存在について述べた¹。前者は1934年に大阪朝日新聞が竹島を取材した記念として、アシカ猟の頭領であった中渡瀬仁助氏に取材写真を贈ったものである。后者は1965年に大阪朝日放送が竹島のドキュメンタリー番組（以下、「竹島番組」と略す）を制作するため、アシカ猟の権利を持っていた橋岡忠重氏（以下、橋岡氏と略す）

1 井上貴央「1941年の撮影と判明した竹島でのアシカ猟師の集合写真」『島嶼研究ジャーナル』第11巻2号(2022年)73-87頁。

を中心に取材を行い、取材風景や取材で得られた資料をアルバムにして贈ったものである。これらのアルバムの写真は、出自が明確にされないまま公開・引用され、時には誤った情報とともに国内外に拡散していった。

現在、『橋岡アルバム』の所在は確認できず、これまで紹介されたことがない。「竹島番組」での竹島渡航者の証言は、かつての漁猟活動を知る上で重要である。また、この番組には韓国の「鬱陵島・独島学術調査団」が1953年に撮影した動画が含まれていることが分かった。本稿ではこの「竹島番組」と『橋岡アルバム』について紹介するとともに、アシカ猟写真の国内外への拡散について考える。

1 『中渡瀬アルバム』の概要

『中渡瀬アルバム』には竹島のアシカ猟の写真がある。1934年6月9日から22日にかけて、大阪朝日新聞の松浦直治記者・長谷川義一写真部員らがアシカ猟を取材し、同年6月28日から11回にわたり「日本海のアシカ狩」と題して大阪朝日新聞



図1 『中渡瀬アルバム』。「網にかかったアシカの引き上げ」(表1の写真N④)の頁を開いている。

に連載された²。取材記念として贈られた『中渡瀬アルバム』は、それからしばらくは注目されることはなかった。

1952年の李承晩ライン宣言で韓国が竹島領有を主張すると、過去のアシカ猟が注目された。1953年7月10日には、鳥根県東京事務所の水保孝氏が中渡瀬仁助氏の自宅にて聞き取り調査を行ったが、その際に「写真帳を借りた」とされる³。また、同年10月18日には、竹島巡視から帰着した外務省の川上健三事務官らが中渡瀬宅を訪れ、アシカ猟の様子を聴取している⁴。おそらく、この時も『中渡瀬アルバム』が供覧されたに違いない。その後は1965年に「竹島番組」の制作で利用されるま

2 井上貴央『大阪朝日新聞社・大阪動物園の昭和九年竹島渡航に関する新聞記事拾集録—付竹島アシカ猟写真の真実—』日本動物学会第92回米子大会公開講演会配布冊子(2022年)。

3 アジア局第二課「中渡瀬仁助口述書」『竹島漁業の変遷』(1953年)42-43頁。

4 山陰新報(1953年10月20日)「50年前のアシカ狩 西郷町の中渡瀬さん語る」。

では、アルバムは注目されることがなかった。

1992年10月13日、島根県立三瓶自然館の佐藤仁志指導課長(当時)と筆者はニホンアシカ資料調査のため隠岐を訪れ、中渡瀬家でこのアルバムを確認した。中渡瀬ナツ氏は、「自分も歳をとったので、自分の代でアルバムを処分したいと思い、トンド焼きに出そうと思った」と話されたので、その重要性を説明して『中渡瀬アルバム』を譲り受けた。

アルバムは、24枚の黒い台紙からなり、表見返しには白いポスターカラーで「贈中渡瀬氏 日本海リャンコウ島海驢狩記念 昭和九年六月大阪朝日新聞社 長谷川義一撮影」と書かれている(図1)。それぞれの写真には、簡単な説明が記されているが(表1)、写真が脱落して確認できないものもある(表1のN⑳)。

表1 『中渡瀬アルバム』の写真一覧

ページ番号	写真番号	写真説明など(原文のまま)
表見返し		贈中渡瀬氏 日本海リャンコウ島海驢狩記念 昭和九年六月 大阪朝日新聞社 長谷川義一撮影
1	N①	リャンコウ島全景
2	N②	リャンコウ島(東島)に於ける一行のテント
3	N③	リャンコウ島見ゆ 船上向かって左より吉田船長、中田氏、松浦記者、寺内技手
4	N④	網にかゝつた海驢を陸に引き上げる
5	N⑤	我等の乗船 神福丸 隠岐西郷港出帆 昭和九年六月九日
6	N⑥	東島の大洞窟に於ける釣魚
7	N⑦	海驢網の準備
8	N⑧	海驢網を張る(西島にて)
9	N⑨	沖の島の海驢を鐵砲で狙ふ
10	N⑩	西島沖の岩礁上に群れ遊ぶ海驢
11	N⑪	洞窟内の海驢
12	N⑫	捕つた海驢を箱詰めにする
13	N⑬	捕れた海驢を吊り上げて箱に入れる
14	N⑭	リャンコウ島(東島)に於ける海驢狩の一行
15	N⑮	リャンコウ島(東島)に於ける一行三人 向つて右より松浦、寺内、長谷川
16	N⑯	島の夜 一行のテントで座談會
17	N⑰	夜の網にかゝつた二頭の大海驢
18	N⑱	夜網にかゝつた二頭の大海驢
19	N⑲	銃の手入れ
20	N⑳	あらしの夜 将棋に興ずる人々
21	N㉑	群れ立つ海猫(東島にて)
22	N㉒	群飛する海猫(東島にて)
23	N㉓	リャンコウ舞(東島岩礁上にて)
24	N㉔	リャンコウ島を後に帰途につく(カンコで見送りの人達)

2 『橋岡アルバム』について

『橋岡アルバム』は、17枚の22穴台紙を針金で螺旋綴じにした右綴じアルバムである。裏見返しには「昭和四拾年拾貳月 大阪朝日放送寄贈放送記者鈴木昭典 報道部睦好三郎」と書かれていた。鈴木昭典氏は当時36歳。後にも数々のドキュメンタリーを制作した人物である⁵。

1992年7月6日に、筆者は橋岡氏のご子息の橋岡照敏氏を訪ね、アルバムを拝見し、全ページをコピーするとともに、一部の写真をブローニー版のフィルムカメラで接写した。現在確認できる『橋岡アルバム』は筆者のコピー版のみである(図2、3)。アルバムの内容のリストを表2に示す。

アルバムには取材風景や個人写真、新聞の切り抜きが貼られていた。表見返しにも写真が貼られており(図2-F)、重ね張りの写真もある(図2-11など)。このような状況は贈呈されたアルバムとしては不自然で、後に橋岡氏が重ね貼りしたものと考えられる。

写真の大きさは、1枚の例外を除くと、130×180mm、130×90mm、120×80mm、62.5×89mm(名刺判)の4種類である。これらのうち、最も大きいサイズの写真は大阪朝日放送によるもので、アルバムに貼って贈呈され、一部のものは同梱されて送られてきたものと考えられる。その中には、テレビの走査線が写るものがあり、ビデオが普及していなかった当時、テレビ映像を写真にして贈ったものと思われる。このテレビ映像写真はすべて重ね貼りされたものである。

「山林での集合写真」(図2-5⑩)は、同じネガから焼き付けた小さなサイズの写真が2枚ある(図2-2⑥、2-14⑳)。これは集合写真に写っている人々に配布するため、小さなサイズで焼き増しして橋岡氏に送ったものと考えられる。

大阪朝日放送が焼き付けた写真は、取材風景が16種類18枚(表2、図2、3の③、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪、⑫、⑬、⑭、⑮、⑰、⑱、⑲、⑳、㉑、㉒、㉓)、テレビ映像が4枚(表2、図2、3の⑯、㉔、㉕、㉖)、『中渡瀬アルバム』の複写写真が15枚(表2、図2、3の㉗、㉘、㉙、㉚、㉛、㉜、㉝、㉞、㉟、㊱、㊲、㊳、㊴、㊵、㊶、㊷、㊸、㊹、㊺)である。

5 朝日放送出身のドキュメンタリー作家。1929 - 2019年。以下のウィキペディアに詳しい。
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%88%B4%E6%9C%A8%E6%98%AD%E5%85%B8> (as of September 5, 2022).



図2 『橋岡アルバム』の表見返し(F)から23頁(23)まで。1992年にコピーして簡易製本したもので、実物は所在が確認できない。①から⑳の写真説明は表2を参照。



図3 『橋岡アルバム』の24頁(24)から裏見返し(B1-3)まで。③から⑳の写真・サイン・新聞記事の説明は表2を参照。

④、⑫、⑫)、昭和16年大阪毎日新聞撮影の写真が2枚(表2、図3の③、④)⁶、1965年9月3日号『週刊朝日』に掲載された竹島の航空写真が1枚(表2、図2の⑩)、1953年6月27日に島根県と海上保安庁が設置した制札の複写写真が1枚(表2、図2の⑳)である。

写真には年月が書き込まれているものもあるが、その筆跡は橋岡氏のものである⁷。書き込み時期は不明だが、1982年11月4日に藤田茂正氏が橋岡氏に聞き取り調査した録音テープには、この書き込みが話題に上がっている、それ以前の書き込みである。

「40年10月」と書き込みのある写真は、すべて取材風景を写したものである。また、「昭和9年6月」と書かれたものの大部分は、『中渡瀬アルバム』の複写写真である。ただし、「東島の猟師小屋とテント」の写真(図3の③)には「昭和16年6月」の書き込みがあるが、これは『中渡瀬アルバム』の写真であり、「昭和9年6月」の誤りである(表2)。

6 前掲書(註1)73-87頁。

7 橋岡氏の自筆書類と比較した。「年」の字体に特徴がある。